

全五卷

欧米作家と日本近代文学

ロシア・北欧・南欧篇

福田光治・剣持武彦・小玉晃一 編

教育出版センター

比較文学シリーズ

欧米作家と日本近代文学 全五巻

編者紹介

ふく	だ	みつ	はる	
福	田	光	治	立教大学教授
けん	もち	たけ	ひこ	
剣	持	武	彦	二松学舎大学教授
こ	だま	こう	いち	
小	玉	晃	一	青山学院大学教授

第三巻 ロシア・北欧・南欧篇

検印省略

昭和五十一年一月五月初版発行◎

編 集 福 田 光 治
小 剣 持 武 彦
柴 崎 玉 晃 一
発行者 芳 夫

発行所 株式会社 教育出版センター
東京都豊島区北大塚三一九一二

電話 〇三(九一七)八九三〇(代)
振替口座 東京一四六一二
郵便番号 一七〇

◇乱丁・落丁本はおとりかえいたしません。

は し が き

比較文学研究は戦後の学問の国際化の気運のなかで大きく進展しつつある。日本の近代文学研究のために従来寄与してきた諸業績は、もっぱら日本の作家における欧米文学の影響という角度からなされてきた。そうした成果は最近において数々の研究書や講座として世に示されている。しかしまだ国別に外国の作家をまとめ、その作家の日本文学への影響を系統的に論述した一連の叢書や講座はその類を見ない。私どもはもはや日本の比較文学の研究がそうした叢書を作るべき段階に達していると判断した。また、比較文学への世上の期待はそうした叢書を求めていると感じるにいたった。たまたま教育出版センターでも比較文学の書物を出したいということで相談を受けたとき、私どもはそこで上記のような企画を提案したわけである。

1 私どもは比較文学の研究上、常々多くの学恩を受けつつある先輩・知友の協力を求め、そのもつとも得意とする作家を受けもっていたとき、国別・作家別に、五巻のシリーズを編むことができた。とくに本シリーズでの特色は外国文学研究家と日本文学研究家の双方に担当していただいた点にある。比較文学の研究には自国及び外国文学の研究者相互の協力がぜひとも必要と思われる。一人にして両者を兼ねなければならないのが比較文学者であるが、おのずからその資質・能力には限度がある。おのれをわきまえ、他のすぐれた成果から謙虚にしかも批判的に学ぶことからこそ研究の

進展があらう。その意味でも本シリーズは最適の執筆者に登場していただけたと確信している。なお比較文学の方法はある方向を持ちながらも、読者がこのシリーズで実際に読みとられるように、そのアプローチのしかたには多様性がある。そしてそこに今後の課題もあると思う。

読者は本シリーズを国別・作家別にその最も興味のおもむくところから読みはじめることができる。そして欧米諸国の文学を代表するすぐれた個性が、日本の文学者にどのように受容され、変容し、日本文学に新しい要素を植えたか、あるいはまた拒否されたかをつぶさに見ることができよう。かくて読者も新たな問題意識のもとに作品に接することになるであらう。

比較文学は単に影響関係を云々することのみに止まるものではなく、むしろ相互への理解と認識を深めることによって、日本文学・日本文化の特質を明らかにすることにこそその使命があらう。まさに比較文学は国際学であるとともに日本学であり、人文学の新しい可能性を示すものであるという自負のもとに、私どもはこのシリーズを世に送る。

読書子・研究家諸賢の忌憚のないご批判を期待したい。

昭和四十九年八月

編者

福田光治
小剣持武彦

目次

はしがき

概観—日本におけるロシア文学—……………新谷敬三郎

ロシア文学移入の経路　ヨーロッパ經由

のロシア文学　ロシアの問題　ロシア

とヨーロッパ　ロシア文学受容の時点

ロシア文学受容の二つの態度

ツルゲーネフ……………安田保雄

はしがき　ツルゲーネフの移入　二葉

亭四迷訳「あひゞき」　二葉亭四迷訳「め

ぐりあひ」　森鷗外とツルゲーネフ

嵯峨の屋御室とツルゲーネフ　二葉亭四迷

訳「うき草」と国木田独歩　ツルゲーネフ

の英訳と国木田独歩・上田敏　英訳「ツル

ゲーネフ全集」と田山花袋・島崎藤村

相馬御風その他のツルゲーネフ 翻譯 有島

武郎・志賀直哉とツルゲーネフ

チェーホフ 柳 富子 84

チェーホフと日本文学 明治・大正の紹介

文献を通して見たチェーホフ チェーホフ

の翻訳者たち

ドストエフスキー 小沼文彦 137

はじめに 移入の時代 人道主義的受容

の時代 暗黒の時代 開花の時代

トルストイ 久保忠夫 172

はじめに 発禁もの 徳富蘆花

内田魯庵 加藤直士と住谷天来 平民社

とトルストイ 日露戦争とトルストイ

トルストイの死 個人訳全集

イブセン 藤木宏幸

210

足袋つぐや…… イブセン受容の四つの時期

イブセンの移入 イブセンの流行 イブセン会

新しい思想家として イブセン模倣作

アンデルセン 神宮輝夫

248

『アンデルセン童話』のテーマと特徴

巖谷小波とアンデルセン 広介とアンデルセン

死後の世界について 賢治とアンデルセン

メーテルリンク 菊田茂男

274

上田敏とメーテルリンクの出会い

明治・大正期におけるメーテルリンクの受容

志賀直哉の調和的精神とメーテルリンク

日本近代文芸におけるメーテルリンクの運命

ダンテ 剣持武彦

306

明治文学におけるイタリアのイメージ

島村抱月「囚われたる文芸」と「アーヴィ
ング劇『ダンテ』」 上田敏におけるダ
ンテとダヌンツィオ 漱石文学とダンテ
内村鑑三のダンテ鼓吹 正宗白鳥、阿部
次郎、芥川竜之介 ダンテと現代

セルバンテス

.....大島

正

キリシタン禁制まで 明治初期のドン・
キホーテ 逍遙と漱石の理解 本格的な
翻訳の初まり 永田訳ドン・キホーテ
日本的なドン・キホーテ論 日本人
スペイン文学の理解

第三卷

ロシア・北欧・南欧篇

〈概 観〉

日本におけるロシア文学

新谷 敬三郎

ロシア文学移入の経路

日本にロシアの文学が継続的、多少とも組織的に入ってきて、何らかの役割を果たすようになるのは明治以後、ほぼ一八八〇年代からである。

ロシア文字移入の経路は大別して三つ考えられる。(一)東京外国語学校、(二)ニコライ神学校、(三)丸善、である。

一、東京外国語学校が正式に発足したのは明治六年(一八七三)十一月のことで、開成学校から分離したのである。開成学校はやがて東京大学(明¹⁰)となり、それが帝国大学となるのは明治十九

年（一八八六）、帝国大校令によってである。初め外国語学校は専門学校への予備階梯であって、明治七年には愛知、広島、新潟、宮城にも設立され、開成学校への進学コースであった。のちに東京外国語学校はなかに高等商業学校を置き（明17）、それが一年後には逆に東京商業学校と改称した。管理、経費の合理化と外国語は商業に必要なという認識からだったという。いずれにしても、明治二十年代初め頃までは日本の高等教育の制度はかなり流動的で、固っていなかった。この不安定のために、のちの二葉亭四迷、長谷川辰之助は明治十九年に東京商業学校附属語学部露語科を卒業まぎわに退学するのである。彼が東京外国語学校に入学したのは明治十四年（一八八二）、十八歳のときである。この年の一月、ロシアではドストエフスキイが死に、三月には皇帝アレクサンドル二世が人民の意志派のテロに倒れている。

当時の外国語学校におけるロシア語教育がどういうものであったかについては、二葉亭の同級生太田黒重五郎の「種々なる思ひ出」（明42・6『新小説』、岩波版『二葉亭四迷全集』第9巻所収）という談話がある。それによると、当時は単に語学の勉強ばかりでなく、地理も歴史も代数も幾何もすべてその習っている外国語で授業し、試験の答案にもすべてロシア語を用いなければならなかった。そして毎週一回土曜日にある科目について一人ずつ試験をされた。上級になると、ロシアの有名な小説を教えられる。ロシア人が二人いて、一人はコレンコ、もう一人はアメリカへ亡命したグレー、このグレーが大変朗読が上手でテキストがたくさんないから先生が読んできかす。トルストイ、カラムジン、プーシキンなどの作品を生徒は黙ってきいていて、読み終ると、その小説に現れた主人公の性格を批評したりポートを提出する。先生がそれを見て直してくれる。

こうした外国語学校の、とくに文学教育についてももう少しつっこんで調べたものがある。北岡誠

司氏の「二葉亭とロシア文字——小説観を中心に」(角川版近代文学鑑賞講座第1巻『二葉亭四迷』所収)である。それによれば、二葉亭が在学していた頃の外国語学校の図書館が所蔵していたロシア語関係の本はすべてで三百点足らず、冊数で二千余、つまり同じ本が幾冊かだぶってあったということで、そのなかで語学、文学関係は三分の一以上占めていて百点あまり、さらに文学となるとせいぜい五十点余、そのなかにもどんな本があったかは詳らかではないが、この冊数ではとても作家や詩人の全集があったとも思われず、おそらくは教科書風に編纂したアンソロジーが大半であったかもしれない。そのなかにストユニン(ウラジミール・ヤコヴレヴィチ、一八二六—一八八八)の『露国外国文学論究指南』という本と『露文学教授論』という本があった、これらの本によって生徒たちはロシア文学あるいは文学一般について教えこまれた。グレーの教え方がこのストユニンの教授法に則っていたであろうと北岡氏は推定している。そしてそこから二葉亭の「小説総論」も胚胎するのであると。このストユニンという人はギムナジウムの国語の教師であり、何冊か教科書をかいているが、一八六四年に出した『露文学教授論』は従来の文学教育を一新し、新しい教授法の指針を与えた名著であったらしく、一九一三(大正)年まで八版を重ね、広く世に行われた。

二、ロシア文学が日本へ入ってきた次の経路は通称ニコライ神学校である。今も東京駿河台にそびえているニコライ堂、日本ハリストス正教会の歴史については、牛丸康夫(神戸正教会司祭)の『明治文化とニコライ』(昭44教文館)という小冊子があって、それによると――

のちのニコライ大主教(イワン・ドミトリエヴィチ・カサトキン、一八三六—一九二二)がモスクワから日本へ派遣されたのが、一八六一年。函館のロシア領事館付司祭としてきたのである。そのニコライが東京へきて、神田駿河台に居を定めたのが明治五年(一八七二)、二年後に伝導学校を設立した。や

がて伝導学校とロシア語で神学を学ぶ幼年学校とを一つにして正教神学校ができる。それは高等小
 学校を卒えたものを入れ、七年制でロシア語で旧新約聖書、正教訓蒙、^{カテヒジス}教会史、地理歴史、論理
 学、奉神礼、説教、物理学、心理学、基礎神学、定理神学、規責神学（比較神学）、教会法、哲学
 といった課目を学んだ。のちに（明治一四、五年頃か）女子神学校もできた。神学校が初めて卒業生
 を出したのは十五年、卒業生は二人であったという。その前年小西増太郎が入学している。そのと
 き入った生徒は五十名だった。そのうち三人が明治二十年神学校を出ると、ロシアに留学した。小
 西もその一人である。すでにそれまでペテルブルグやキエフの神学校に留学生を送っているが、そ
 のなかでロシア語や文学において逸することのできないのは、岩沢丙吉、この人は神学校教授とな
 り、ロシア公使館司祭セルゲイ・グレーボフと『露西亜文法』を出したが、この本は大正時代まで
 唯一の權威ある学習書として広く使われた。その後、神学校校長となった瀬沼恪三郎（明1—昭8）、
 夏葉（明8—大4）夫妻、昇曙夢（明11—昭31）、さらに黒田乙吉、茂森唯士、樹下節といった人々がいる。
 昇曙夢の回想「研究と翻訳の五十年」（『ロシア文学研究』第3集、昭23）によれば、教会には三階建て
 の図書館があって、二階が宗教書、三階が文学書で、十九世紀ロシア文学のほとんどすべての作品
 が備えられていたが、関東大震災で三階が焼失し、文学書のすべてが烏有に帰したという。ニコラ
 イ大主教自身、文学の愛好者で、とくにゴーゴリ、ドストエフスキを読むことをすすめた。昇の
 処女出版は『露国文豪ゴーゴリ』（明37春陽堂）である。

正教会は明治十三年十二月から、月二回の機関誌『正教新報』を出していたが、明治二十六年
 （一八九三）に神学哲学雑誌『心海』、女性むけの文芸雑誌『裏錦』を発行した。それには関竹三郎、
 それから上記の岩沢丙吉、小西増太郎、瀬沼恪三郎といった人々が参画した。『心海』の記事の多

くはもっぱらロシアの雑誌からの翻訳転載だと想像される、そうは断っていないけれども。とくにモスクワの心理学会の機関誌『哲学と心理学の諸問題』（一八八六—一九一八）が、おそらく有力な一源泉になっていた。この雑誌はN・グロート、ブレオブラジエンスキイ、トルベツコイ、ロパーチンらが編集していたが、やがてP・ストルーヴェ、S・ブルガーコフら、いわゆる合法マルクス主義者やキスチャコフスキイ、ベルジャーエフら「道標」^{グエーヒ}派、ボグダーノフらマッハ主義者らが寄稿した。ところで例えば、明治二十六年十二月、翌一月の『心海』に、「歐洲に於ける徳義思想の二代表者、フリデリヒ・ニツシェ氏とレオ・トウストイ伯の意見比較」「ニツシェ氏とトウストイ伯徳義思想を評す」という興味深い記事が載っているが、それは明らかにこの心理学会誌の一八九三年一月号に載った上記グロートの「現代の道徳的理想（フリードリヒ・ニツシェとレフ・トルストイ）」に據っている。九三、四年といえば、ロシアにニツシェが流行し出した頃で、それから七年後にシェストフの『トルストイ伯とニツシェの善の教説』が書かれ、また十年後に『悲劇の哲学』が書かれ、それと前後して日本では高山樗牛らによってニツシェが唱導されるのである。『心海』のこの記事は非常に早いニツシェ紹介であるといえよう。

がこの雑誌が当時の知識人にどれだけ読まれ、受容られたかは、はなはだ疑問である。それは『裏錦』についても言える。この文芸誌のロシア文学紹介についていえば、特筆すべきは残月庵（石川喜三郎）訳「脚本偽皇子」（明治26・9—28・2）で、これはプーシキンの『ボリス・ゴドノフ』の優れた完訳である。その他詩、散文の翻訳もあるけれども、創作とともにほとんど見るべきものがないのは、何といっても正教会という立場が宗教的、あるいはむしろ倫理的態度を制約したからであろう。

ヨーロッパ經由のロシア文学

三、ロシア文学が日本へ入ってきた三番目の経路は丸善という洋書屋である。それはヨーロッパを經由したロシア文学ということで、それが果たした役割は、ある意味において、前二者より遙かに大きかったといえる。

丸善という本屋が日本の文明開化に寄与した事情については、木村毅の『丸善外史』（昭44丸善）に詳らかである。この本は惜しいことに記述が正確さを欠いているけれども、明治開化期の風俗を知るといふ意味で、大変面白い本である。外史と名付けたのは、すでに『丸善社史』（幸田成友著昭26）という本があるからである。

丸善は明治改元とともにできた。早矢仕有的という人が横浜新浜町に店を開いたのが、明治元年（一八六八）十一月だそうである。この早矢仕有的、天保八年の生れ、元来オランダ医者で、慶応三年築地の鉄砲洲にあった慶応義塾に入って、自分の商才を発見した。ときに三十一歳。屋号を丸屋として、最初に商なつたのは教科書の大量輸入であった。それというのも、福沢諭吉が緒方塾でオランダ語を勉強したときの不便が身にしみていたので、慶応三年二度目にアメリカへいったとき、教科書を大量に仕入れてきた。それに倣ったのである。が舶来の教科書は決して廉価ではなかったので、次にはその翻刻を行うことになり、そして出版も手がけるようになった。百科全書上中下と索引一巻、明治十六、七年のことである。この百科全書は初め文部省が手がけ、明治七年から翻訳刊行にかかったもので、原書は“William and Robert Chamber, *Information for the people*”